

本校の令和6年度WWL（ワールド・ワイド・ラーニング） コンソーシアム構築支援事業に係る事業完了報告書

1 事業の実施期間

令和6年4月1日 ～ 令和7年3月31日

2 事業拠点校名

学校名 新潟県立三条高等学校

3 構想名

希望に満ちた未来を創るリーダー育成システムの構築 ～ 地場産業の町・日本の穀倉地帯からSDGs達成を目指す ～

4 構想の概要

拠点校が所在する三条・燕を中心とした県央地域は、金属加工や農業が盛んで、品質の高い製品・農産物を生産し、独創的なアイデアで世界に進出する企業が集まり、SDGsは重大な関心事である。この特色を背景に、「産業」「農業・食料」「環境」を基本テーマとしながら、SDGs達成に向け、地元企業等と連携しながら地域課題の理解を深めるとともに、海外の高校・大学等とのオンライン交流・国際会議等を通じ、視野を広げて課題を捉え直し、課題解決を目指して、科学技術を活用しながら探究を深めていくカリキュラムを開発し、その成果を県内外に普及する。この実現に向けて、地域・県・世界をつなぐALネットワークを構築し、大学、企業、専門機関等と協働して、オンライン・対面の両面から高度な学びを提供する。カリキュラム等の開発成果は、随時、SNS等で広く発信し、次世代を牽引する人材育成スキーム新潟モデルを示し、SDGs達成に寄与する。

5 本事業における教育課程の特例の活用：有

拠点校の教科・科目

		1 学年	2 学年	3 学年
グローバル探究	グローバルフィールドワーク	・現地研修（地場産業・農業法人等）	・課題研究テーマに関連する場所や対象を訪問、調査、研究	・課題研究テーマに関連する調査、研究の検証
	WWL 特講	・大学教授等による特別講義（月1回程度）「データにみる新潟県」「SDGs」等	・大学教授等による特別講義（月1回程度）「自治体の地域課題への取組」等	・大学教授等による特別講義
	課題研究	・探究活動に関するガイダンス ・グループでの課題設定、課題解決に向けた研究活動 ・大学、企業、研究機関による指導 ・日本語での報告書作成	・グループでの課題設定、課題解決に向けた研究活動 ・大学、企業、研究機関からの指導 ・英語での報告書作成 海外研修	・研究活動における3年間の成果をまとめた報告作成 ・大学、企業、研究機関からの指導
WWL 情報		・「情報Ⅰ」の内容を基に、学校設定科目「グローバル探究」に係る課題研究、データ分析、成果発表等に関連した内容を含め、長岡技術科学、三条市立大学等と連携してカリキュラムを開発する。一人に一台ずつ配備されたタブレット端末を活用したオンライン授業等を組み合わせて、場所を選ばずにより高度な学びを実現し、情報活用能力や思考力、表現力等の育成を目指し、実践研究する。		海外連携校、県内連携校、WWL 拠点校等による、SDGsをテーマにした国際会議を開催
WWL 論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ		・「論理・表現Ⅰ」の内容 ・海外連携校との文化交流、地域課題の共有等	・「論理・表現Ⅱ」の内容 ・海外連携校との意見交換、共同研究等	・「論理・表現Ⅲ」の内容 ・海外連携校との意見交換、共同研究等

教科名 「WWL」

科目名 ①「グローバル探究」（1・2学年各2単位、3年1単位）、②「WWL 情報」（1・2学年各1単位）、③「WWL 論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」（1・2学年各3単位、3学年2単位）

概要 地域課題を踏まえながら、グローバルな課題と共通するSDGs達成に向けて、地域と協働しながら解決策を探究し、発信・行動する力を育成するための教科・科目を設定する。文系理系の別にかかわらず生徒全員が履修する。

詳細 ① グローバル探究（「総合的な探究の時間」の代替）

次のア～ウにより、「地場産業」、「農業・食料」、「環境」を基本テーマとして、SDGs達成に向け、課題研究を行う。

ア グローバルフィールドワーク

（1学年）グループで地場産業や農業法人などの現地研修を行い、それぞれの現状・課題、世界との関係、起業事例、環境への配慮等を学び、成果をまとめ、発表する。

（2・3学年）課題研究のテーマに関係する場所等を訪問し、調査・研究する。

イ WWL 特別講義（1～3学年前半、月1回程度・夏期集中実施：合計10回）

大学教員や地元企業経営者による現代社会・現代科学・地域課題等に関する講義により、生徒が幅広い学問分野を概観し、専門的な研究や文理を超えた学びに触れる。

ウ 課題研究（1～3学年）

各教科及び上記ア、イで学んだことを踏まえながら、生徒がグループを組み、地域に関連する課題を自ら設定し、その解決に向けて研究活動を行い、解決策をまとめ提言を作成する。その際、大学、地元企業や研究機関等から指導を受ける。課題解決策は地域と協働して実行し、その成果を検証する。

② WWL 情報（「情報Ⅰ」の代替）

「情報Ⅰ」の内容を基に、学校設定科目「グローバル探究」に係る課題研究、

データ分析、成果発表等に関連した内容を含め、長岡技術科学大学等と連携してカリキュラムを開発する。一人一台ずつ配備されたタブレット端末を活用したオンライン授業等を組み合わせて、場所を選ばずにより高度な学びを実現し、情報活用能力や思考力、表現力等の育成を目指し、実践研究する。

- ③ WWL 論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（「WWL 論理・表現Ⅰ」は1学年3単位、Ⅱは2学年3単位、Ⅲは3学年2単位）

「論理・表現Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」の内容に加えて、オンライン会議ツールやメールを用いて、海外連携校や海外連携大学と文化交流、地域課題の共有、課題研究に関する意見交換、共同研究、英語での研究報告書の作成等を行う。

6 管理機関の取組・支援実績

（1）実施日程

業務項目	実施期間(令和6年4月1日～令和7年3月31日)											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 運営指導委員会の開催			○						○		○	
② 検証委員会の開催			○						○			
③ カリキュラム・アドバイザーによる拠点校指導	○	○	○			○			○		○	
④ 事務補助員の拠点校配置	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
⑤ 高校生国際会議実行委員会の開催		○		○	○	○						
⑥ 教員研修		○		○								

（2）実績の説明

【実施体制の整備】

- a. 管理機関の下、拠点校を中心として組織的に研究開発・実践に取り組む体制の整備状況について

- ・高等学校教育課副参事指導主事、県立教育センターの指導主事の2人が拠点校を定期的に訪問し、事業の進捗状況を確認するとともに、カリキュラム開発や高校生国際会議の開催についての指導・助言を行った。

- b. 本事業が円滑および適切になされるよう、管理機関の下、関係機関の間で十分な情報共有体制を整備した状況について

- ・管理機関がメディアプラットフォームを活用した情報共有体制を整備した。
- ・上記メディアプラットフォームや報道機関等を通じて、拠点校の取組状況や高校生国際会議の開催等について発信した。

- c. 構想内容の水準を維持し、必要な改善を図るために、管理機関の拠点校等の校長が果たした役割について

- ・管理機関の長は、本事業の運営を統括し適切な管理を行った。
- ・拠点校の校長は、本事業の目的に照らし、拠点校における研究開発・実践が進められるよう、適切な業務運営を行うとともに、県高等学校長協会への説明・情報提供、連携校への情報提供を行った。

- d. 本事業の実施に際し、専門的見地から指導・助言に当たる運営指導委員会の開催実績や事業の実施状況を検証するための組織（検証組織）等が検証するために収集した資料等の状況について

- ・運営指導委員会を6月、12月及び2月に行うとともに、検証委員会を6月、12月に行った。本事業の進捗状況や成果等について報告するとともに、運営指導委員から指導・助言を受けた。また、検証委員は実績・成果についての検証を行った。また、事業計画に対して、運営指導委員及び検証委員より指導・助言を受けた。

- e. 管理機関が、拠点校等の卒業生の卒業後の進路とイノベティブなグローバル人材としての成長の過程を追跡把握する仕組みを構築し、必要な情報を収集する状況について
 - ・拠点校の生徒及び教職員に対してアンケート調査を実施した。
- f. 国が実施するアジア高校生架け橋プロジェクトや海外の連携校等からリーダー、架け橋となる留学生等の日本での学習や生活を支援する体制について
 - ・A F S長期留学生の受け入れ（ドイツ1人、2学年に配置、令和5年8月～令和6年7月）及びA F S短期留学生（パキスタン1人、2学年に配置、令和6年8月～12月）に関する連絡・調整を行った。

【財政等支援】

- a. 管理機関が、本事業の運営にかかる経費を国からの委託経費のみではなく、自己負担額として、計画段階よりさらに計上したもの
 - ・特になし
- b. 管理機関が、事業の実施に必要な取組に対し、人的又は財政的な支援や教職員を育成するための研修やセミナー等を実施した状況について
- c. 管理機関が、国の委託が終了した後も事業を継続的に実施するために計画したこと
 - ・国の委託期間終了後の、本事業の継続的な実施に向け、県予算のほか、同窓会による基金の活用やP T Aの協力方法について検討した。同窓会による基金については、管理機関及び県財務課、拠点校とで情報を共有し、活用方法等についてやりとりを行った。

【A Lネットワークの形成】

- a. 構想目的・年度計画の策定、事業の運営、達成状況の評価・見直しのため、管理機関の長と拠点校等における本事業の運営責任者、主要な協働機関の関係者等をメンバーとするA Lネットワーク運営組織の実績について
 - ・A Lネットワーク事務局が、高校生国際会議開催に向け、他県の状況について情報収集等を行った。
- b. A Lネットワーク運営組織により、本事業が円滑及び適切になされるよう、関係機関の間で十分な情報共有体制を整備し、新たな協働事業の開発、有効な事業実施を実現したことについて
 - ・拠点校主体の「高校生国際会議」や「県央ネット発表会」、管理機関主催の「新潟県高校生探究フォーラム」等を実施する際、A Lネットワーク校等に対して積極的な参加を促し、案内して学校間の交流が活性化するよう働きかけている。
- c. A Lネットワーク運営組織が、国内外の大学、産業界、その他国際機関等との連携交流を通じて、当該プログラムの修了生の、国際的な分野を学ぶ国内外の大学への進学や国内外のトップ大学等への進学、海外留学等の促進に寄与したことを記載する。
 - ・海外留学についての啓発活動や、海外交流や海外連携に関わる情報収集、交渉、企画を行った。
 - ・海外交流についての実践事例等の情報を収集し、新たに提携校となった海外学校との連絡・調整を行った。具体的には、オンラインによる台湾、モンゴルとの有志生徒による海外交流の企画を行った。
 - ・インドネシア研修旅行では「トビタテ留学 JAPAN」の奨学生であった方から引率していただき、現地の環境課題について探究しながら深く学ぶ機会となるとともに、海外留学の可能性を検討する機会となった。また、インドネシアのバリ島に本拠地を置く環境シンクタンクであり、サステイナブルビジネスを行う su-re.co とのコラボレーションにより現地研修を進めた。
 - ・高校生国際会議で、参加した生徒が県内留学生とも交流し、海外に目を向ける契機

- となった。
- ・「県内大学留学生ふれあい事業」において、拠点校に講評・助言を行う県内大学留学生との連絡・調整を行った。
- d. **ALネットワーク運営組織に専任者からなる事務局を設置した状況とともに、本事業のカリキュラムを開発する人材の配置状況について**
- ・令和4年7月に配置した事務補助員が、本事業に関わる事務作業を担当した。
- e. **ALネットワーク運営組織において、国内外の大学、企業、国際機関等と協働し、国内外の高等学校等との連携によるテーマに関連した高校生国際会議等の開催準備状況について**
- ・令和6年9月4日(水)、5日(木)に、三条市立大学を会場に、「WWL高校生国際会議 2024」を開催した。新潟県内から連携校を含め12校、近県のWWL拠点校1校が現地に、海外連携校1校がオンラインで参加した。現地参加者は、新潟県内の高校のAFS留学生3人を含む生徒166人、サポーターとして県内大学留学生28人の194人となった。
 - ・拠点校で実施する高校生国際会議の研修を目的に、拠点校の教職員及び生徒が他県の拠点校(長野県上田高校、名古屋大学教育学部附属中学高等学校)の高校生サミットに参加した。
 - ・高校生国際会議におけるディスカッションの場面で、生徒のサポーターとして、県内大学留学生の参加調整、事前協議を長岡技術科学大学、AFS新潟県事務局の協力により行った。
 - ・高校生国際会議での懇親プログラムの計画実施にあたって、三条商工会議所、三条市内の商店街や企業と協議を行い準備・運営にあたった。
- f. **事業成果の社会普及のため、社会に開かれたフォーラムや成果報告会などの実施(あるいは計画)について記載すること。**
- ・令和6年9月4日(水)に高校生国際会議の懇親プログラムとして、三条市一の木戸商店街をフィールドに、参加者グループがフィールドワークを行った。
 - ・令和6年9月7日実施の九月祭(三条高校の文化祭)において、1・2年生の全135班のポスターを掲示し、来校者に対して探究活動の周知を行った。
 - ・令和6年12月20日実施の2学年グローバル探究学年発表会に、新潟県三条地域振興局職員2人が参加し、生徒の探究発表に対し、助言・意見をいただいた。
 - ・令和7年1月28日(火)実施のWWL県央ネット発表会で、地域の連携校6校を含む7校の探究発表を行うとともに、講評者として三条市、三条商工会議所、燕市観光協会、新潟大学の職員、参観者として三条市、三条商工会議所、燕市商工会議所の職員が参加した。
 - ・令和7年3月17日(月)実施の1・2年生合同ポスターセッションに、保護者、同窓会関係者の参加を得て、生徒の探究活動の周知と助言・意見をいただく機会とする。(計画)
- g. **ALネットワーク運営組織が、構想目的の達成に資する取組を計画し、その効果的かつ円滑な運営のための情報収集・提供を行ったことについて**
- ・拠点校で実施する高校生国際会議の研修を目的に、拠点校の教職員及び生徒が他県の拠点校(長野県上田高校、名古屋大学教育学部附属中学高等学校)の高校生サミットに参加した。(再掲)

7 研究開発の実績

(1) 実施日程

業務項目	実施期間（令和6年4月1日～令和7年3月31日）											
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月
① 拠点校成果報告会の開催					○	○		○	○	○		○
② 県内連携校との研究交流会						○						
③ 報告書の作成												○
④ ポスター・リーフレットの作成・配付												
⑤ グローカルフィールドワーク				○	○	○	○				○	
⑥ WWL特講		○	○	○			○		○			
⑦ 拠点校生徒の海外研修への参加										○		

(2) 実績の説明

【研究開発・実践】

a. 設定したテーマ（SDGs、経済、政治、教育、芸術等）について

- ・1年生は、SDGsの17ゴールから自己の興味関心により一つのゴールに関するレポートを作成し、それを基に生徒3～4人による探究班を編成、70班が現代世界の諸問題から各々が探究テーマを設定し、問題解決に向けた探究活動を行った。（テーマについては一覧表参照）
- ・2学年は、「地場産業」「農業・食料」「環境」を重点分野として、2～4人で編成された65班が各々、地域課題の解決を主眼とした探究テーマを設定し、その解決に向けた探究活動を行った。（テーマについては一覧表参照）
- ・3学年は、1・2年時の探究活動を踏まえ、自分が解決を目指す社会課題をテーマとして設定し、自分自身がその解決あるいは解決に向けた貢献にどのように関わるか、その実現に向けた進路設計を考察・探究した。

<2年生探究テーマ一覧>

通番	分野	探究テーマ
1	自然環境	果物の再利用
2		耕作放棄地を有効活用するには？
3		昆虫食を活用しよう
4		佐渡の例を踏まえて～絶滅危惧種の絶滅を防ぐには～
5		里山を守ろう
6		サボテンで解決する地域の環境問題
7		三条市の気温上昇の謎
8		地震被害の減災と防災
9		植物の保全利用について
10		新潟県三条市下田の自然環境と観光の両立
11		プラスチックの分類について
12		港の清潔さを守ろう
13		雪の有効利用について
14		ライスレジンを普及させよう

15	地場産業	飲食店の効果的な営業 in 商店街
16		カトラリーを生かしたSDGsの取り組み
17		県央地域の地場産業における担い手の増加を目指して
18		県央地域の職業に就く人を増やすには。
19		三条凧を利用して県央の企業を広めよう
20		台湾の人々を新潟に呼び込む方法
21		燕三条地域の金属加工の後継者不足を解消したい
22		燕市の繁華街サンロードの活性化をいかに行うか？
23		伝統工芸品を用いた地域復興
24		新潟のおいしい食べ物を使って他県から人を呼ぼう
25		新潟の金物を広めるために
26		新潟の果物をブランド化しよう
27		バス利用者を増やして新潟県の観光産業を盛り上げる
28		見附市のニット産業について
29	社会環境	空き家をどうするプロジェクト
30		意見を出しやすい場をつくるには
31		いじめのない、みんなが心地良く過ごせる集団を考える
32		外国人労働者の受け入れと向き合い方
33		柏崎・刈羽原子力発電所とエネルギー開発
34		観光客激増大作戦
35		教材デジタル化による様々なメリット
36		現代のいじめの現状と対策
37		子育てと男性の関わり方について
38		三条市の人口増加とその対策
39		三条市の定住者を増やそう
40		届け！！ 三条カレーラーメンの魅力
41		新潟県の観光を発展させるには
42		新潟で小中学校の教員を増やすためには？
43		左利きに優しいまち
44		ふわふわ言葉で優しい世界を
45		みんなのための教室を作るには？
46		若い世代が将来子どもを生みたいと思う環境づくり
47		若者に政治に関心を持たせるためには
48	食料・農業	音楽で食品ロスを減らそう
49		環境に優しい水耕栽培を広めよう
50		高齢化が進む新潟県の農業を助けよう
51		米の廃棄を削減するための米の様々な使い道
52		昆虫食は本当に必要なのか？
53		さるなしを利用した地域の活性化

54		三条市の活性化におけるルレクチェを使った取り組み
55		地元の食材の活用方法
56		地元の農地を復元する
57		電照栽培の普及による食料難の解決
58		新潟県の枝豆を世界に
59		新潟県の米の消費量を増やすには
60		新潟県の児童クラブの偏った食事をどう改善していくか
61		新潟県の特産品を使って地域活性化
62		農家農業の現状を知る
63		農家の減少をふせぐために
64		本町きゅうりで地域活性化
65		ライスレジンの可能性

< 1 年生探究テーマ一覧 >

通番	探究テーマ
1	子どもが働かなくて済む未来を作る！
2	日本とアメリカの教育格差
3	ニジェールの男女の教育格差をなくすため
4	中央アフリカで教育を普及させるために
5	全ての人が幸せな社会～虐待を許さない～
6	日本の教育格差を減らすには
7	私たちの日常生活から発展途上国の教育問題を解決できるのか
8	女性が育児とキャリアを両立しやすくするためには
9	中央アフリカ共和国のバンギ在住の 5 歳未満の子どもの識字率向上のために
10	子どもに対する虐待の根絶
11	南スーダンの子どもたちの教育問題を解決するには
12	新潟県の教育について
13	プラスチックによる海洋汚染
14	本来あるべき生態系を維持するために
15	日本の豊かな海を守るためには
16	エチオピアの水問題
17	インドの水問題
18	生物を大切にしよう
19	プラスチックから水生生物を守る方法は？
20	寿司から見える海の現状
21	日本の海の生態系
22	海とプロテクション
23	海を守るために
24	南スーダンにおける飢餓問題

25	日本にも飢餓はある！～子供を苦しめる相対的貧困の飢餓～
26	フェアトレードの普及で飢餓を救う
27	貧困地域で適切な環境作りを進めるためには
28	身の周りの相対的貧困者を救いたい
29	インドの飢餓を無くすために
30	インドの飢餓、インフラの改善について
31	日本の飢餓
32	発展途上国と先進国間の経済格差をなくすためにはどうするか
33	コンゴ民主共和国の飢餓
34	公平、公正な貿易の実現
35	南アフリカの治安を改善するには
36	正しく分別するために！！
37	三条市のフードロス
38	家庭系フードロス削減
39	フードロスに対して高校生ができること (in 新潟)
40	不要品で救える命
41	途上国の食品ロスをなくして飢餓を減らそう
42	家庭における食品ロスについて
43	ポイ捨てを減らす
44	家庭ごみ
45	残さず食べよう～いつものご飯～
46	野菜のフードロス
47	日本の男女格差
48	若者を呼ぶことができるまちづくり
49	発展途上国の産業基盤について
50	三条市の洪水災害について
51	エチオピアの人々が安全な水を使えるようにするために
52	温暖化対策×福祉のまちづくり
53	意識変革～同世代の未来を奪わないために～
54	外国人と日本人どちらも暮らしやすい町にするには？
55	健康とは
56	観光による町の衛生問題の解決
57	地震に強いまちづくり
58	発展途上国の道路の発達
59	三条市の二酸化炭素を減らすには
60	環境に良いエネルギー供給
61	日本の水問題
62	中国の二酸化炭素排出量と地球温暖化
63	地球温暖化による海面上昇の影響

64	水素発電で地球温暖化を解決する
65	ブルーカーボンによる二酸化炭素吸収の促進
66	再生可能エネルギーの余剰エネルギーの活用
67	日本の水問題について
68	地球温暖化と EV 車
69	学校で地球温暖化対策をしよう
70	一人でも多くの人が安全な水を手に入れるためには

b. イノベーティブなグローバル人材育成に資する体系的かつ先進的なカリキュラム研究開発を、国内外の大学、企業、国際機関等との協働により行ったことについて

・グローバルフィールドワーク（GFW）の実施

8月下旬から11月上旬

2学年の探究班が、地域の関連事業所へ訪問調査やアンケート等のデータ収集を行った。

11月上旬から12月上旬

1学年の探究班が、地域の関連事業所等へ訪問調査やアンケート等のデータ収集を行った。

2月26日(水)

1年生が、設定した6コースから各自で選択し、選んだコースに分かれて、地域事業所訪問を実施する。(計画)

訪問先：アネックスツール(株)、(株)ツインバード、田中衝機工業所、プラントフォーム、新潟県醤油協業組合、石油資源開発(株)、生ごみバイオガス発電センター、長岡震災アーカイブきおくみらい、長岡市歴史文書館、新潟交通(株)

・長岡技術科学大学との「WWL情報」プログラミング授業の実施

11月12日(火)、15日(金)

大学生10人がティーチング・アシスタントとして、プログラミング実習に参加した。

・新潟工科大学との「WWL情報」プログラミング授業の実施

11月12日(火)、15日(金)

大学生5人がティーチング・アシスタントとして、プログラミング実習に参加した。

2月14日(金)

大学生3人がティーチング・アシスタントとして、プログラミング実習に参加した。

・新潟大学創生学部田中一裕教授の協力により以下のプログラムを実施した。

7月23日(火)

田中一裕氏を講師に、1年生対象にWWL特講「探究学習の進め方」を実施した。講義終了後、1学年の職員と探究の指導法等について意見交換を行った。

8月29日(木)

1年生のグローバル探究中間発表会に助言者として、田中一裕教授と学生4人が参加、担当分野の探究班に対する意見・助言を行った。

11月20日(水)

2年生の探究分野別発表会に田中一裕教授、熊谷英和教授、学生3人が参加。担当分野の探究班に対する意見・助言を行った。

- c. 設定したテーマと関連し、外国語や文理両方の複数の教科を融合した内容を、外国語を用いながら探究活動を行う「グローバル探究」等の教科・科目を設定した状況及びその実施にあたって外国人講師等を活用した実績についても記載すること。
- ・「WWL論理・表現Ⅰ」において、「グローバル探究」の時間で各自が作成したSDGsに関わるレポートを、長岡技術科学大学等の外国人留学生に対して英語でプレゼンテーションを行い、留学生たちが助言・指導を行った。
- d. 海外の連携校等への短期・長期留学や海外研修等を、カリキュラムの中に体系的に位置付けて実施したことについて
- ・令和7年1月26日(日)～31日(金)、インドネシアのバリ島研修を実施し、生徒26人教員2人が参加した。参加生徒はミッション「バリ島の環境課題を自分事化し、身近なところでアクションを起こす」を現地で取り組んだ
- e. 体系的なカリキュラムの編成にあたって、文系・理系を問わず、各教科をバランスよく学ぶ教育課程の編成をしたことについて
- ・学校設定教科「WWL」において、学校設定科目「グローバル探究」「WWL情報」「WWL論理・表現Ⅰ～Ⅲ」を配し、様々な業種の事業所などへのフィールドワークや、文系・理系を問わない幅広い分野の特別講義(WWL特講)を実施するとともに、理系大学院留学生との英語交流などを通じて、課題研究や英語による成果発信へとつながるプログラムになるよう工夫した。
 - ・1・2年生対象に、三条高校卒業生を講師とする社会人講義を行った。1・2年生が各自の希望に応じて14会場に分かれ受講した。講義に先立ち、2年生が探究テーマについて発表し講師からアドバイス等を受けた。多様な視点からの検証を促すことをねらいとして、探究テーマは講師の専門等にかかわらず配置した。
 - ・「WWL論理・表現Ⅰ」において、グローバル・スタディーズ・プログラム(国際理解集中講座)に取り組み、留学生を交えてグローバルな社会問題について英語でディスカッションし、その結果についてデジタル・デバイスを活用してスライドを作成し、英語でプレゼンテーションを行った。
- f. 学習活動が、構想目的の達成に資するよう工夫したことについて
- ・1・2学年とも分野別中間発表会、分野別発表会を実施し、コメンテーターとして新潟大学創生学部の教授・学生の参加を得て、外部の識者からの助言や意見を受ける機会とし、探究活動に自らと異なる視点で検証する機会を与えることで、探究手法の充実を企図した。
 - ・2年生の「グローバル探究」を、学年一斉での実施とした。そのねらいは、①1年時の探究テーマの継続、②1年時からの探究班の継続、③理系クラス、文系クラスの枠にしばられない班編成、④探究分野に適した指導教員の配置を行う、の4点である。
 - ・3年生は、「私の進路設計」の発表により、自分の進路実現に対する意思をより確かにするとともに、お互いの意思を共有することで連帯感の醸成を図った。
 - ・外部団体からの依頼や紹介されたイベント等に、関連する探究テーマの探究グループを中心に情報提供し希望生徒が参加した。
- ※社会との探究活動の接続の好機であり、外部からの依頼に対しては積極的な参加を呼びかけている。
- 6月28日(金) 新潟県議会傍聴 14:00～16:30
生徒8人(3年6人、2年1人、1年1人)が参加
県議会の傍聴と正副議長に挨拶
- 9月25日(水) 自律型無人探査機(AUV)展示会の案内とAUVによる岩船沖海底パイプライン調査の見学 16:00～17:00
会場：聖籠町網代浜船溜まり
戦略的イノベーション創造プログラム(SIP)関係者による説明

2年生5人が参加

- ・WWL特講の中で、授業の枠を超えた知見の拡大の機会を設け、多面的な視点の育成と探究学習の深化をめざした。

- 5月21日(火) 【1学年】 内容：キャリアデザイン
講師：池田政隆氏(神田外語学院)
- 5月22日(水) 【2学年】 テーマ：地域課題への取組
第一部 自治体の取組
講師：三条市、燕市、見附市、加茂市の職員
第二部 民間事業所の取組
講師：白鳥みのり氏(玉泉堂)、高野雅哉氏(燕市商工会議所)、馬場大輔氏(道の駅たがみ)
- 6月21日(金) 【1学年】 内容：法と社会
講師：県央地区弁護士6人
- 7月2日(火) 【全学年】 講義：子どもがかわると地域が変わる
講師 山田彩乃氏(株式会社 Shitamichi HD 常務取締役／NPO 法人 Lily&Marry' S 理事長／地球の子供食堂と宿題 Cafe 代表)
ミニ討論会：地域で支援が必要な子どもたち～ヤングケアラー、子ども食堂～
座談会：講師と希望生徒とのフリートーク
- 7月23日(火) 【1学年】 内容：探究学習の進め方
講師：田中一裕氏(新潟大学創生学部教授) (再掲)
- 10月1日(火) 【全学年】 講義：支援の現場で学んだ「ひと・チーム・世界」の
変え方
講師：鬼丸昌也氏(NPO 法人テラ・ルネッサンス)
ミニ討論会：私たちの支援のかたちを考える
座談会：講師と希望生徒とのフリートーク
- 10月16日(水) 【1年生海洋関連をテーマとする7班23人】
講義：新潟県の漁業の現状
講師：藤田 将氏(新潟県漁業協同組合連合会)
- 10月30日(水) 【全学年】 講義：AI 時代 知識の枠を超えるイノベーション
ー 感性を生かした融合型の学び ー
講師：アハメド・シャハリアル氏(三条市立大学学長)
ミニ討論会：わたしたちの学びを再考する
- 12月2日(月) 【全学年】 ※人権教育、同和教育講演会と兼ねる
テーマ：新潟水俣病に見る差別と偏見
講師：藤田伸一氏(県立環境と人間のふれあい館長)

h. 高大連携による大学教育の先取り履修を可能とする取組を実施(または計画)したことについて

- ・引き続き、次年度の検討課題とする。
- i. より高度な内容を学びたい高校生が学習できる環境を整備したことについて
 - ・生徒一人ひとりに貸与されている iPad と、Google アカウントを積極的に利用し、Web 上の情報収集、フィールドワーク等のための関連事業所等との連絡、収集データの整理、資料作成、プレゼンテーションに取り組むよう指導した。
 - ・探究活動に関わる資料等の印刷の便宜を図るために、6 台のインクジェット・プリンターを設置し、適宜生徒が利用した。
 - ・社会人講義、WWL 特講、グローバル探究の発表会において、各分野の第一線で活

躍するOB・OG、研究者、経営者等を招へいし、専門性・実践的な助言や意見に接する場を設けることで実践性、実現性の高い探究になることをねらいとした。

- ・WWL特講では、希望した生徒と講師との座談会を行い、現実の社会の中で活躍する方と直に交流できる場を設定した。

j. **国が実施するアジア高校生架け橋プロジェクトや海外の連携校等からリーダー、架け橋となる人材を受け入れ、日本人高校生と留学生と一緒に英語等で授業・探究活動を履修するための学校体制を整備したことについて**

- ・令和6年9月に開催した高校生国際会議に新潟大学や長岡技術科学大学の留学生がサポート参加し、教員と協働で生徒の活動の支援にあたった。
- ・県内大学留学生ふれあい事業（県単独事業）により様々な国の留学生を連携大学等から招へいし、英語で交流を行い、英語コミュニケーション能力を高めるとともに、日本の文化のみならず異文化への理解を深めた。

8 目標の進捗状況、成果、評価

a. **イノベティブなグローバル人材の育成状況について**

「SDGs達成を目指し、希望に満ちた未来を創る『提言・挑戦型』リーダー」を目指し、育成したい資質・能力として、（1）イノベティブ・マインドセット（多様な価値観の理解、粘り強く挑戦する力、アントレプレナーシップ、新たな価値の創造）、（2）現代社会の課題を理解する力（人文社会科学・地政学・科学技術等の知識・理解、情報・データサイエンス）、（3）課題を探究し、解決する力（課題発見力、論理的思考力・分析力・協働性、創造力、最適解を導く力）、（4）コミュニケーション・スキル（英語コミュニケーション力、ICTスキル、データ・メディアリテラシー、倫理観）を掲げている。

これらの資質・能力の習得度合いを計測するデータとして、独自作成のアンケートを年度初めと年度末に行っている。質問事項は下記の①から⑱の18項目について、最高評価を4とする4段階評価で生徒が回答している。網掛け部は平均値2点台のもので、工夫・改善項目として捉えている。

質問項目 ※表中の①から⑱に該当する。

- ①県央地域の課題を理解している
- ②日本や世界が直面している問題を理解している
- ③SDGsの概要を理解している
- ④文章や情報を正確に読み解き、それについて他者と議論することができる
- ⑤課題について、科学的に思考・分析することができる
- ⑥実験結果やアンケート結果をわかりやすくまとめることができる
- ⑦学校外の人の意見を活かしながら、課題解決に取り組もうとしている
- ⑧相手に伝えるときに、わかりやすく説明しようとしている
- ⑨ICTを活用し、情報を収集、分析、発信することができる
- ⑩英語を使って、目的、場面、状況に応じてコミュニケーションがとれる
- ⑪海外交流について意欲がある
- ⑫県央地域の産業や特産物に興味がある
- ⑬海外の文化や国際問題に興味がある
- ⑭将来、地域の問題解決に貢献したい
- ⑮将来、国際的に活躍したい
- ⑯SDGsの達成に貢献したい
- ⑰自分にはない、多様な価値を持つ他者の考えを取り入れていきたい
- ⑱希望に満ちた未来を作るために、提言や挑戦ができるリーダーになりたい

この事業の対象となったR 3年度入学生からR 6年度入学生のアンケート結果をまとめたものが次の表である。

表 1 : WWL 事業対象生徒のアンケート結果

※表中の現 3 年生はR 4 年度入学生、現 2 年生はR 5 年度入学生、現 1 年生はR 6 年度入学生である。

		WWL 事業対象学年の推移																										
		卒業生(R3入R5卒) の推移							現 3 年生の推移							現 2 年生の推移							現1年生					
		R3.6	R3.12	R4.6	R4.2	R5.5	R6.1	推移ライン	R4.6	R4.2	R5.5	R6.2	R6.5	R6.12	推移ライン	R5.5	R6.2	R6.5	R6.12	推移ライン	R6.5	R6.12	推移ライン	R6.5	R6.12	推移ライン		
課題発見	①	2.2	2.8	2.8	2.9	2.9	3.0		2.5	2.8	3.0	3.1	2.8	3.2		2.3	2.8	2.8	3.0		2.3	2.6						
	②	3.1	3.2	3.1	3.1	3.1	3.2		3.2	3.2	3.2	3.3	3.2	3.3		3.0	3.3	3.1	3.2		3.0	3.2						
	③	3.2	3.3	3.3	3.3	3.4	3.4		3.4	3.4	3.3	3.4	3.4	3.6		3.3	3.6	3.4	3.4		3.2	3.4						
課題解決の 手法	④	3.0	3.2	3.1	3.1	3.1	3.2		3.2	3.1	3.0	3.2	3.2	3.5		2.9	3.3	3.1	3.3		3.0	3.2						
	⑤	2.8	3.0	3.0	2.9	2.9	3.1		3.0	3.0	2.9	3.1	3.1	3.2		2.7	3.1	2.9	3.1		2.7	2.9						
	⑥	3.0	3.2	3.2	3.3	3.3	3.3		3.1	3.2	3.1	3.4	3.3	3.5		2.9	3.3	3.2	3.4		3.0	3.3						
	⑦	2.9	2.9	3.1	3.1	3.0	3.1		3.1	3.2	3.2	3.2	3.2	3.4		3.0	3.2	3.2	3.3		3.0	3.3						
リテラシー スキル	⑧	3.5	3.5	3.6	3.6	3.6	3.6		3.5	3.7	3.6	3.7	3.6	3.7		3.6	3.7	3.7	3.7		3.6	3.7						
	⑨	2.7	3.1	3.0	3.1	3.1	3.2		3.1	3.2	3.1	3.3	3.2	3.4		3.0	3.4	3.2	3.3		3.0	3.2						
マインド セット	⑩	2.2	2.4	2.2	2.3	2.3	2.5		2.3	2.6	2.6	2.7	2.7	3.0		2.2	2.8	2.5	2.7		2.3	2.8						
	⑪	2.8	2.9	2.6	2.4	2.6	2.9		2.9	2.9	2.6	2.8	2.7	2.9		2.9	3.0	2.8	2.9		2.9	3.0						
	⑫	2.7	3.0	2.9	2.8	2.8	3.0		2.8	2.8	2.9	2.9	2.8	3.1		2.8	3.0	2.9	3.0		2.8	2.7						
	⑬	3.0	3.1	3.0	2.9	3.0	3.2		3.2	3.1	3.0	3.1	3.1	3.2		3.2	3.3	3.2	3.1		3.2	3.2						
	⑭	2.8	2.9	2.8	2.9	2.9	3.1		2.9	2.8	2.8	3.0	2.9	3.2		2.9	2.9	2.9	2.9		2.9	2.9						
	⑮	2.7	2.7	2.5	2.4	2.4	2.7		2.7	2.7	2.5	2.7	2.6	2.8		2.7	2.7	2.6	2.6		2.6	2.7						
	⑯	3.3	3.3	3.2	3.2	3.2	3.4		3.3	3.3	3.2	3.3	3.3	3.5		3.5	3.4	3.3	3.3		3.3	3.3						
	⑰	3.5	3.4	3.5	3.5	3.6	3.7		3.6	3.5	3.5	3.6	3.6	3.7		3.6	3.6	3.6	3.6		3.5	3.6						
	⑱	2.8	2.9	2.8	2.9	2.9	3.0		2.9	2.9	2.8	3.0	2.9	3.2		2.9	2.9	2.8	2.9		2.9	2.9						

対象となった4つの学年とも、「課題発見」「課題解決の手法」「リテラシースキル」「マインドセット」に関わる項目は、右上がり傾向が読みとれ、これらの能力向上は本事業の取り組みの成果である。2年時に⑪海外交流について意欲がある、⑬海外の文化や国際問題に興味がある、⑮将来、国際的に活躍したい、⑯SDGsの達成に貢献したい、グローバル分野に関わる項目の数値が低下している。これは1年時はSDGsを入口にグローバル分野、2年時には地域にかかわる分野を探究テーマにするように指導しているゆえの現象であり、3年時には回復しているので優先的な改善点としては扱わないが、グローバルな視点に基づく地域課題への取り組みという観点の弱さでもあり、教員間で共有し2年生への指導方法の工夫の糧としたい。

2点台なので改善対象となるが、⑩英語を使って、目的、場面、状況に応じてコミュニケーションがとれる、については向上率が高い項目である。R 3年度入学生に比してR 4年度入学生、R 5年度入学生、R 6年度入学生の向上率が高いのは、「WWL 論理・表現Ⅰ」、「WWL 論理・表現Ⅱ」を1単位増やし、英語力向上の取り組みを強化した成果であり、特にグローバル・スタディーズ・プログラムのような実践的なディスカッションとプレゼンテーションのプログラムの導入は、本事業以前にはなかったもので、生徒の意識変革への効果が大きい取り組みとなった。

本事業の構想上、⑱希望に満ちた未来を作るために、提言や挑戦ができるリーダーになりたい、については1年時、2年時とも2点台で大きな変化が確認できない状況のままであるが、R 3年度入学生、R 4年度入学生とも3年時の数値として3点台であり、R 4年度生がR 3年度生を上回っていることから、新カリキュラム下での取り組みの成果である。また、数値には現れていないが、1、2年生からWWL関連の発表会や国際交流イベ

ント、地域振興に関わるイベント等に参加する生徒が出ていることは、リーダーシップの醸成の現れと捉えてよい。

このアンケートとは別に1年生と2年生では、学年末に1年間の探究活動の振り返りの一環として自己評価を行っている。評価項目は、①情報収集力：情報を集めるために必要なソースや方法を選択して、各種ツールを駆使し効率よく必要な情報を収集することができる。②情報分析力：集めた情報をもとに、必要な事象を抽出することができる。③課題発見力：事象間の因果関係に基づいて結論を導くことができる。あるいは課題等を指摘、発見できる。④他者と協働する力：収集・分析等探究に関わる活動を、他者と協力し行うことができる。⑤他者との対話力：結論や課題等を導くために、自分の意見を主張するとともに、他者の意見を尊重した議論、問答ができる。⑥他者への質問力：他者の探究活動を理解するとともに、その発展のために意見や疑問点を積極的に発言することができる。また、そのことが自らの探究に対する取り組みの向上につながることを理解している。⑦資料作成力：自分の考えを文章や図を使用して論理的に表現し、明解な資料として作成できる。⑧発表する力：自分の考えを、マナー順守で適切なツールを用い、身体表現(発声、身ぶり等)を交えて語り、他者に伝えることができる。⑨主体的な取り組み：明確な目的意識を持って、自らが意欲的、積極的に取り組んでいる。グループ内の探究活動を率先して、グループの活動をリード、活性化できる。⑩総合評価、の10項目である。評価は5段階(5が最高評価)とした。

表2：1年生の過年度比較

	情報 収集力	情報 分析力	課題 発見力	他者と協 働する力	他者との 対話力	他者への 質問力	資料 作成力	発表 する力	主体的 取組	総合 評価
R 3 年度	4.12	4.03	3.68	4.31	4.09	3.39	3.93	3.63	4.00	3.63
R 4 年度	3.92	3.91	3.73	4.14	3.96	3.58	3.82	3.71	3.81	3.80
R 5 年度	4.12	4.15	3.97	4.38	4.23	3.92	4.17	3.97	4.04	3.93
R 6 年度	4.03	4.09	3.90	4.33	4.04	3.82	4.02	3.88	3.86	3.77

表3：2年生の過年度比較

	情報 収集力	情報 分析力	課題 発見力	他者と協 働する力	他者との 対話力	他者への 質問力	資料 作成力	発表 する力	主体的 取組	総合 評価
R 4 年度	3.81	3.87	3.64	4.01	3.77	3.49	3.79	3.45	3.63	3.96
R 5 年度	3.91	3.91	3.84	4.24	4.03	3.69	4.05	3.89	3.86	4.06
R 6 年度	4.20	4.17	4.02	4.42	4.20	3.95	4.10	3.91	3.93	4.16

表2「1年生の過年度比較」、表3「2年生の過年度比較」のように、WWL事業の進行に比例して、各学年段階の自己評価は上昇傾向である。このことは、年度ごとの取り組みのその改善と更新の成果の表れである。R 6年度1年生の数値が前年度に比して低い数値になっているが、R 3年度、R 4年度の比しても低いわけではないので、当該学年の資質・能力の現状からすると、2年時には上昇するものと考ええる。1年時の探究テーマであるグローバルから、2年時の探究テーマであるローカルへと変化するが、テーマの変化に生徒が対応できるような指導の改善が課題である。

本事業の取り組みによる生徒の変容について、新教育課程でWWLに取り組んだR 6年度卒業生(R 4年度入学生)を例に補足する。

R 6 年度卒業生(R 4 年度入学生)の進路として、外国語学部、外国語大学の受験者が過年度に比べて増加した。前述の独自アンケート結果では、対外的な興味関心度の目処となる⑩英語を使って、目的、場面、状況に応じてコミュニケーションがとれる⑪海外交流について意欲がある、⑬海外の文化や国際問題に興味がある、⑮将来、国際的に活躍したい、は2点台がほとんどの項目であるが、進路として対外的な興味関心に関わる大学・学部を志向する生徒が増えたことは、事業の目的とするグローバル人材育成の成果の表れと考えてよい。別のデータとして英語検定受検者が、データ比較はできないが、受験者数、受験レベルでの変化が英語担当教員の実感としてあるということも指摘したい。また、学校に案内される国際交流イベントに参加希望する生徒が、事業に取り組む中で出てくるようになったことも大きな変容と捉えている。

当該学年に卒業直前にWWLについて改めて「WWL 振り返り」を実施(R 7 年1月28日)した。質問項目は以下の8項目である。

- 1 あなたは、3年間のWWLの取り組みの中で何が1番印象に残っていますか。
- 2 あなたは高校3年間で実用英語検定を受検しましたか。
- 3 WWLに取り組んで、海外のニュース等に興味を持つようになりましたか。
- 4 WWLに取り組んで、英語でコミュニケーションをとることに勇気をもてるようになりましたか。
- 5 WWLに取り組んで、社会問題に興味を持つようになりましたか。
- 6 三条高校に入学したことで経験できたWWLを高校生活の中でどのように自己評価しますか。あてはまるものすべてに○をつけてください。
 - a 探究心がうまれた
 - b 探究の方法を知ることができた
 - c グループで協力しあう姿勢を学んだ
 - d リーダーシップがとれるようになった
 - e 新聞やニュースを見るようになった
 - f 本を読むようになった
 - g プレゼンテーション力がついた
 - h スライドをうまく作れるようになった
 - i 多様な人とのコミュニケーションができるようになった
 - j 自力で遠方に出かけられるようになった
 - k 行動力がついた
 - l その他
- 7 WWLがなかったら、興味を持たなかった、気付かなかった、習得できなかったと思うことを書いてください。
- 8 卒業後、大学や職場でWWLの経験が活かされたと感じた場合、そのことを 教えてもらえますか。

1については、2年の探究活動とする生徒が多く、海外研修や高校生国際会議に参加した生徒はこれらを回答していた。3、5については、「明らかに興味を持つようになった」が多く、7の回答でもSDGs 関連や地域課題、世界の諸問題への気づきがあり、WWLの取り組みが生徒の興味関心を広げる大きなきっかけになっている。海外を含む現代社会の諸問題への興味関心の喚起という点で、劇的な効果を確認できるわけではない。4について、英語を使う経験をしたことで、英語でのコミュニケーションに対する意識喚起は効果があったのではないか。WWLがなかったら、の質問に対し、外国人とのコミュニケーション機会を挙げる生徒が少なくないことから、日常的に英語や外国人に接する機会が極小な地域にあって、このプログラムが一定の成果をもつものといえる。6について、3年生(R 4 年度生)の卒業直前の振り返りアンケートの結果が次表である。この学年の1年時と2年時の振り返り結果と併せて分析する。

	情報 収集力	情報 分析力	課題 発見力	他者と協 働する力	他者との 対話力	他者への 質問力	資料 作成力	発表 する力	主体的 取組	総合 評価
1年時 (R4年度)	3.92	3.91	3.73	4.14	3.96	3.58	3.82	3.71	3.81	3.80
2年時 (R5年度)	3.91	3.91	3.84	4.24	4.03	3.69	4.05	3.89	3.86	4.06

6. WWLの経験をどのように自己評価するか

選択肢	a	b	c	d	e	f	g	h	i	j	k	l
割合	48.7%	50.4%	59.0%	12.8%	22.2%	10.3%	47.0%	62.4%	38.5%	7.7%	18.8%	0.0%

高い数値を示しているのが、「他者と協働する力」「他者との対話力」であり「c グループで協力しあう姿勢を学んだ」も高い数値となっている。3年時は個人活動であったが、1年時、2年時と異なるメンバーで協働する経験は生徒にとって大きな糧になっているといえる。「資料作成力」や「発表する力」も向上しており、これらの経験も探究活動の中で習得されている。50%程度を示している「a 探究心がうまれた」「b 探究の方法を知ることができた」に関連するのは「情報収集力」「情報分析力」「課題発見力」であるが、数値の向上率としては高くはない。しかし、これらの能力の習得とその向上への意識を持てたことを学びとして実感として持つ生徒が多いということである。

生徒自身の実感として、「探究」に関わるマインドセットと手法、プレゼンテーションの経験は強くあることがうかがえる。またその過程における他者との協働協力も強い実感を与えている。これらの実感とその成果が発揮される場面は卒業後の活動の中と考えるが、卒業後の事後協力への意思表示を多くの生徒が同意しているので、その報告に期待をしたい。

当該学年は、授業時間割に「グローバル探究」を1コマ組み込み「定期的な探究活動を行う」「学年一斉実施形態としたことで生徒の意向に沿った班編制ができる」の2点について、新カリキュラム編成に合わせて前年度から改善した学年である。この改善の探究活動への効果は、教員の指導上、実感しており今後も継続していくこととしている。

b. ALネットワークが果たした役割等について

- 令和6年9月に、「WWL高校生国際会議2024」を開催した。新潟県内12校、近県のWWL拠点校1校が現地に157人、海外連携校1校5人がオンラインで参加した。県内のAFS留学生3人とAFS留学生だった1人がオンライン参加を加え、高校生166人が会議に参加した。高校生に加え、県内の大学留学生28人がサポーターとして会議に加わった。
- 今年度は2日間とも三条市立大学を会場とした。会議開催の案内やAFS留学生の参加、大学留学生の募集に際しては、ALネットワークを活用している。新潟県で国際会議を開催し、参加者間のディスカッション、生徒の交歓、発表等の機会を提供交換するために、ALネットワークの存在と役割は大きい。
- 令和7年1月28日（火）に、燕三条地場産業振興センターを会場に、「WWL県央ネット発表会2024」を開催した。県央ネット校5校、講師として新潟大学、三条市、三条商工会議所、燕市観光協会の職員が参加、参観者が5人、参加者総数122人となった。この発表会も、ALネットワークを構成する中核のネットワークである県央ネットが高校、大学、行政、事業所の連携がスムーズに機能する基盤となった。

c. 短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況等について

- ・短期目標については、新潟ALネットワークの構築は高校生国際会議の開催により基本的ラインができた。今後はその安定的、継続的運用について検討したい。
- ・拠点校における数値目標である『生徒意識調査（提言や挑戦ができるリーダーになりたい）「そう思う」及び「ややそう思う」が75%』については、令和6年度の結果が73.2%となった。令和5年度70.7%、令和4年度70.1%、令和3年度65.3%と年々増加してきたが、目標値には届かなかった。

以下は、短期的、中期的及び長期的に設定した目標の進捗状況等である。

○ 短期的目標（令和6年度末まで）

ア 新潟ALネットワークの構築

- ・ 高校生国際会議の開催：令和6年9月4日（水）～5日（木）の2日間、三条市立大学を会場に「WWL高校生国際会議2024」を開催した。新潟県内11校、近県のWWL拠点校1校が現地に157人、海外連携校1校5人がオンラインで参加した。県内のAFS留学生3人とAFS留学生だった1人のオンライン参加を加え、高校生166人が会議に参加した。高校生に加え、県内の大学留学生28人がサポーターとして会議に加わった。（再掲）
- ・ 探究学習・課題研究を軸とした文理融合のカリキュラム及びシラバス・評価方法の策定：当該ネットワーク校である、SSH校やSGHネットワーク校等の評価方法を参考に、研究を進め、課題発表時のルーブリックを策定した。今後は、当該ネットワークを含め、県内学校で共有できるような、評価方法へと改善を進めていく。
- ・ 連携大学等からの課題研究指導及び単位認定：事業協働機関である長岡技術科学大学、新潟県立大学、新潟大学等から継続的に課題研究に係る指導・助言をいただいており、連携体制が構築できつつある。今後は、三条市立大学との連携体制の構築も検討していく。単位認定に係る仕組みの構築については、引き続き検討していく。
- ・ 管理機関及び拠点校作成のウェブサイト・SNS・オンライン会議システム等の設置：メディアプラットフォームを活用した管理機関及び拠点校・連携校が取り組む事業に関する情報の発信を開始した。クラウドを活用した拠点校や他校の課題研究等の成果等の蓄積・共有・活用を検討する。

イ 拠点校における数値目標 ※（ ）内は令和6年度実績

- ・ 生徒意識調査における「提言や挑戦ができるリーダーになりたい」という項目「そう思う」・「ややそう思う」と回答した生徒の割合 75% (73.2%)
- ・ オンライン授業実施回数 年15回 (0)
- ・ 単位認定授業数 2 (0)
- ・ 海外大学進学者（令和6年度卒業～） 年2人 (－)
- ・ 高校在学中の海外校への短期・長期留学 年5人 (年1人)

○ 中期的目標（令和9年度末まで） ※変更なし

ア 新潟ALネットワークの充実

- ・ 連携大学等からのオンライン授業、単位認定授業の充実
- ・ 海外大学との連携と講義受講
- ・ クラウドファンディング等の基金活用による自立運営

イ 拠点校における数値目標

- ・ 生徒意識調査における「提言や挑戦ができるリーダーになりたい」という項目「そう思う」・「ややそう思う」と回答した生徒の割合 85%
- ・ オンライン授業実施回数・単位認定授業数 年30回実施・5
- ・ 海外大学進学者 年4人

- ・ 高校在学中の海外校への短期・長期留学

年 10 人

○ **長期的目標（令和 13 年度末まで）** ※変更なし

ア **新潟 A L ネットワークの成熟**

- ・ 高校生国際会議への同窓生の参加（オンライン含む）
- ・ 県内すべての高等学校・中等教育学校の A L ネットワーク化
- ・ 全国の A L ネットワークとの接続 ※卒業生の活躍（グローバルリーダーとして世界の人々と協働し、SDG s 達成に貢献）

イ **拠点校における数値目標**

- ・ 生徒意識調査における「提言や挑戦ができるリーダーになりたい」という項目「そう思う」・「ややそう思う」と回答した生徒の割合 90%
- ・ オンライン授業実施回数・単位認定授業数 年 60 回実施・10
- ・ 海外大学進学者数 年 6 人
- ・ 高校在学中の海外校への短期・長期留学 年 20 人
- ・ 海外に関わる仕事や活動をしている同窓生の割合 30%

9 次年度以降の課題及び改善点

(1) 管理機関

○ 財政等支援

国の委託期間終了後の、本事業の継続的な実施に向けた財政支援策についての検討を着実に進めているが、令和 7 年度県予算の内容と県予算に計上する予定の同窓会による基金の運用方法等について、拠点校や関係課と検討していく必要がある。

○ A L ネットワークの形成

ネットワーク校間の交流や連携が充実したものとなっているが、A L ネットワーク運営組織としての取組が情報収集等にとどまっており、本事業の達成状況の評価や見直しを図るための機能を果たす必要がある。

○ 高大連携による大学教育の先取り履修

6 月に実施された連絡協議会での他県との協議や、A L ネットワーク運営組織の事業協働機関である大学関係者から、大学教育の先取り履修の可能性等について情報収集、意見交換するにとどまっており、連携大学によるオンライン授業等を受講できる条件や体制等を整備する必要がある。

○ その他

拠点校は、令和 7 年度入学生以降、新学科を設置する見込みであることから、新学科の取組を含め、本事業の成果をどのように生かすかについて検討する必要がある。

(2) 拠点校の取組

○ 課題研究等

生徒の選択する探究テーマは社会科学分野が中心となっており、文理横断的な知を結集して社会課題の解決するための資質・能力を身に付けさせることを鑑み、探究テーマがより広範な分野に及ぶよう鋭意工夫改善を行いたい。次年度、理数科が開設されることから、自然科学分野の探究活動について相互に効果的な方法を検討していきたい。

オンラインでの海外交流を行っている新モンゴル日馬富士学園、台北城市科技大学商学部応用外国語学科、台中市第二高等学校とも、探究的な学習に関わる相互交流を希望していることから、2 年生を想定して探究活動の中に組み込むことを検討していきたい。

○ 高校生国際会議

自校の行事との日程的な重なりもあり、参加校が前年度に比して減少した。多くの学校の参加のためには10月開催が適当と考え、次年度はその方向で準備を進めたい。会場としての三条市立大学は、参加者の評価も高く、施設面や立地条件等、適当であると考えている。大学のスケジュール等との調整が必要であるが、会場としての使用が実現できるよう調整していきたい。参加者の評価は非常に高く、新潟県内で類似のイベントがない現状においては、自走環境において継続的な開催ができる運営を検討していく。